

チェンバロ

透明なガラス球は落ち
肌色の大理石の紋様の上に落ち
私の視線は時の隙間を滑り落ち

ガラス球は粉々に碎け散り
華麗な王冠の瞬間を通り
初めて透明に点った情熱は散り飛び

チェンバロの音は幻の中に消えた
私の涙も自由の風に乗って去った
ただ、美しい破片だけが残った

チェンバロよ・・・、チェンバロよ・・・
私の指はお前に触れることはあるまい
私に答えて歌ってくれることはあるまい
そも、私にひとつの自負があったなら
ああ、チェンバロの音色よ

(1982.7.2)